

# 超宗教的な靈性をめざして

吉 熙星

KEEL Hee-Sung

この講演文は、2011年6月、吉熙星氏が『尋道学舎』を創立する記念式で行った講演の全文である。南山宗教文化研究所のローチ講座研究所員（2006-2007年）として当研究所に滞在したこともある吉氏は、大学を退職した後、韓国の江華島に『尋道学舎』を設立し、諸宗教対話や瞑想に関心をもつ人々のための研究・教育プログラムを実施している。ここに翻訳して掲載する講演文の中で吉氏は、現代社会における宗教的寛容と深い瞑想生活の本質やその必要性について呼びかけている。

イスラームのあるスーフィーの話です。彼が初めてカーバ神殿—メッカにあり、黒い石が祀られている。ムスリムの巡礼者たちが必ず参拝しなければならない場所—を訪れた時は、カーバ神殿のみを見て神様は見なかったそうです。次の訪問の時は、カーバ神殿とともに神を見ました。最後の三番目の訪問の時は、カーバ神殿は消えてしまい、神のみを見たということです\*。この物語は、イスラームのみならず、すべての宗教の信仰生活と靈性の要をあらわすものであり、さらには、人類の宗教史の方向を物語るという意味をもつとも思われます。このスーフィーの告白を人の信仰生活および靈性 (spirituality) の三段階

\* Cited from F. Copleston, *Religion and the One* (London, New York: Continuum, 1982), p.107. メッカにあるカーバ神殿は、天使のガブリエルがアブラハムに与えたという「黒い石」が祀られているイスラームにおける最高の聖地であり、全世界のムスリムがそこに向かって祈る。メッカへの巡礼は、ムスリムの5大義務の中の一つであり、巡礼のクライマックスはカーバ神殿参拝である。

をあらわすものとして多少自由に拡大解釈しながら、尋道学舎を開院するにあたっての私の講演をさせていただきたいと思います。

このスーフィーが語っているカーバ神殿参拝は、メッカ巡礼の核心であって、それは、すべてのムスリムの一生の念願であり宗教的義務の一つです。それは、イスラームという宗教の可視的側面、すなわち、イスラーム伝統の全体を代表するものとして見なしてもよいでしょう。それが必ずカーバ神殿である必要はありません。コーランでも、ラマダンでもよいでしょうし、他の宗教の場合であれば、ミサや祈り、あるいは、人間イエスや仏のような存在、聖書や仏典のような経典でもかまいません。人間の靈性を触発し、超越的実在との出会いを媒介する宗教の外的要素は数えきれないほど多いです、その中の一つでもよいのです。このような具体的な媒体なしには、宗教的生活は不可能です。私たちの靈的体験とは、真空状態において与えられるのではなく、ある個人や集団が特定の時代、特



定の地域において接する霊的経験の媒体および触発体を通して与えられるものです。私たちは、このような媒体を宗教的象徴と呼ぶことができます。

このスーフィーは、初めてカーバ神殿を訪れた時、神様は見ずにカーバ神殿だけを見たと言いました。これは、彼が宗教の外的な模様、すなわち、カーバ神殿というイスラーム教の象徴を見ただけで、この象徴物が媒介する超越的実在、いわゆる象徴の存在の理由としての神様に会う経験はできなかったということです。禅仏教的に言うならば、月は見ずに、月を指し示す指を見ただけで帰ってきたということになります。実は、こうしたことは、ただこのスーフィーだけの問題ではなく、多くの信者が実際このような水準の信仰生活にとどまっています。彼らは、ある特

定の宗教の外的象徴に出会い、学び、また、その宗教の儀礼を慣習的に守る行為を、信仰生活として誤解しながら生きているのです。

すべての宗教は象徴を持っています。目に見えない実在を媒介する、目に見えるものを象徴としてもっているのであります。ある宗教的伝統を構成するあらゆる要素——神話、教理、儀礼、聖典、聖像、聖人、聖職者など——は、すべてが超越的実在を指し示し媒介する象徴です。残念ながら、信仰者たちは、しばしばこうした事実を知らず、象徴が実在そのものであると錯覚しながら信仰生活を送っています。象徴が象徴であるということを知らず、象徴が実在そのものであると思い、それを絶対化します。こうしたことが、象徴の固定化、物象化、偶像化ということです。

象徴の存在理由は、あくまでも超越的実

在との出会いを媒介することであるにもかかわらず、象徴を絶対化して崇拜し、それに執着します。そして、そうした行為を信仰であると錯覚してしまうのです。私は、これこそ宗教による人間の疎外であると思います。なぜならば、象徴を偶像化して、象徴を造り出した人間が象徴の奴隷、伝統の奴隷、宗教の奴隷になるからです。宗教の偶像崇拜(idolatry=idol, imageの崇拜)であり、この宗教的偶像崇拜は、世俗的価値を崇拜する偶像崇拜とまったく同じく危険なものです。

元暁(617～686;新羅時代の僧侶:訳者注)の文章の中で、次のようなものがあります。ある魔術師が魔術によって、見事に虎を造りましたが、結局はその虎に食われてしまったという話です。私は、この話が、宗教のことも含めて、人間が造りだしたすべての制度、イデオロギー、宗教の逆説的な運命をあらわすと思います。超越的経験によって人間を解放させるために造られた宗教が、逆に人間を拘束し、人間の疎外を助長する、恐ろしいものとして働くという逆説が生じるのです。人間をもっとも自由にさせるべき宗教が、人間の精神を拘束し抑圧するものに化けるのです。実際、宗教だけがそうではありません。人間が造ったすべての制度や法——世俗的法であれ宗教的法であれ——が、こうした問題を抱えています。最初はみな必要だから造られたものですが、時間が経つに伴い人間を縛る束縛と抑圧のものに変わります。「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」(「マルコによる福音書」2章28節)というイエスの御言葉は、実に偉大な人間解放の宣言に違いありません。

先に申しました、スーフィーの信仰と靈性も、最初は宗教的偶像崇拜の段階を超えるこ

とができませんでした。千辛万苦のすえ、はるばる巡礼の道を歩いてきましたが、結局神に会うことはできず、カーバ神殿(宗教の外的側面;象徴、伝統)だけを見て帰ったのです。事実、大多数の人びとの信仰生活は、このようにして始まります。自分が生まれた家の伝統だから、あるいは、たまたま出会ったある宗教の外形の姿に惹かれ好奇心を持って、ある宗教に足を踏み入れることになります。そのあと、その宗教の伝統や象徴について一つずつ学んでいきます。経典を読み勉強し、聖職者の説教や説法、講話を聴きながら、その宗教の伝統についての見聞と知識が豊かになります。しかし、こうした段階は、一つ間違えば、象徴そのものにとどまることになり、それが指し示す超越的実在を見ることができない段階にとどまりがちです。象徴をあまりにも大事にしたゆえにそれに陥って執着するからです。指を見るだけで、いざ月は見ることができないというように、聖書を読んでも神の御言葉を聞かず、仏典を読んでも仏様の御心を悟ることができず、ただただ文字に捕らわれることになります。宗教を愛し執着することが信仰であり、それが神を愛することであると勘違いをしながら、熱心に信仰生活することになります。

信仰者が象徴の象徴性を見逃し、象徴を絶対化してそれにこだわるのには、二つの根本的な理由があります。

一つは文字主義(literalism)です。経典や教理の文字が月を指し示す指であるということを知らずに、まるで言葉や文字が超越的実在や超越的経験をそのまま表現し伝達すると錯覚するからです。象徴的性格をもつ宗教的言語の属性を知らず、それに文字的にこだわるのです。いくら神聖な経典や聖人の言葉





なわれたのであります。

相対的なものを絶対化するという危険性とは、キリスト教とイスラームだけではなく、すべての宗教の中に存在します。絶対的実在、聖なる実在を媒介する象徴そのものがある程度神聖性をもつことになるのは、当たり前なことであり、自然なことでもあります。けれども、象徴が絶対化され崇拜の対象に変わってしまうとき、象徴の存在理由は消えてしまい、そのような象徴に執着する宗教は、結局のところ、独善的かつ排他的なものにならざるを得ません。

仏様の説法の中に、有名な「いかだの比喻」があります。ある人が、いかだに乗って河を渡った後、このいかだがどんなに気に入ったとしても、それを担いでいくという愚かさを犯してはいけない、という説法です。すなわち、仏様の御言葉も、一端用いてからは惜しみなく棄てていきなさいということです。ゆえに、『金剛経』においても、仏様が説法をされた後、実は一言もしたことがないとしばしばおっしゃりながら、今までおっしゃったことをすべて取り消すのです。

宗教において、伝統の権威が神の権威と混同され、象徴と実在が同一視されるという、

極めて危ないことが行なわれます。宗教における伝統の絶対化は、最大の誘惑であり危険です。宗教の偶像崇拜は、世俗的偶像崇拜を凌ぐ害悪を及ぼすからです。スーフィーは、二度目の訪問で、このような危険性を克服したと告白します。次の次元の靈性に昇ったのです。象徴固着症と絶対化と宗教的偶像崇拜の罟を超えて、カーバ神殿も神も見ることができたのです。より正確に申しますと、彼はカーバ神殿を「通して」神に出会うという超越の経験をしたわけです。これは、宗教生活においてもっとも正常なことであり、もともとそうでなければならないのです。

超越を媒介してくれる象徴なしに靈的生活を始める人はほとんどいませんし、続ける人もほとんどおりません。人びとはみな、自分に与えられている特定の宗教伝統の象徴体系の中で、それを媒介として超越的経験をするという、靈的な生活を営みます。キリスト者の場合、神の御言葉である聖書や、神の御子のイエス・キリストを通して、神に出会う経験をします。ムスリムの場合はコーランを通して、仏教徒の場合は仏様の御言葉である経典を通して、仏様の御心を経験することになります。

問題は、象徴を通して神に出会うことが宗教生活において当然のことであるにもかかわらず、数多くの信者が自分の宗教の象徴的伝統を絶対化し固定化しており、象徴体系としての宗教によって、非人間化され奴隷化されているというところにあります。象徴の象徴性を知らないのです。また、数多くの現代人は、自分が属する宗教がもつ硬直して偏狭な象徴体系に飽きて、窒息感を感じたすえ、宗教から脱出しようとしています。伝統的象徴

体系において何の意味も見出せず、信仰生活に無関心になったり、宗教から離れたり、宗教の代用物の中で生の意味を見つけようとします。宗教との縁を切って、徹底的に世俗的に生きることとなります。これは、脱宗教時代の現代世界において、すべての宗教が共通して置かれている危機です。そうなればなるほど、伝統を絶対化し固執しようとする保守主義、ファンダメンタリズム、狂信主義が席卷しがちです。

こうした状況を逃れる突破口は、世俗主義でもなければ、硬直した伝統主義でもありません。それは、第三の道で見いだされます。その道というのは、象徴を象徴として理解し象徴の固定化を超えて、古い象徴的言語を現代人がわかるような新しい言語に自由に再解釈し変える試みです。これは、いわば宗教の現代主義者(modernist)が追い求める道です。キリスト教の場合、シュライアーマッハー以降、現代プロテスタント神学がずっと行ってきた試みですし、このような試みを通して、多くの現代の知性人たちがキリスト教の信仰を維持することができました。カトリックの場合も、1960年代前半に開催された第二バチカン公会議によって、神学の扉を果敢に開き、現代の時代精神と対話する道を選びました。現代のイスラームが置かれている危機の一部は、こうした「イスラーム的現代主義」および「現代主義的イスラーム」の勢力が非常に弱いところにあります。

しかしながら、脱宗教時代の霊性は、こうした現代主義者の選択以上のことを要求していると、私は思います。現代主義者は、まだある一つの宗教にとどまる信仰を求めるからです。脱宗教時代の霊性は、現代化の試みよりももっと過激な選択を要求します。私はこ

れを、スーフィーが示している三番目の段階の霊性において求めたいと思います。すなわち、カーバ神殿は消えてしまい神だけが残るといふ、今までとは異なる新しい霊性の世界が開かれるのです。こうした新しい次元の霊性について、二つのことを申し上げたいと思います。

まず、象徴が象徴であるということを知っている人は、自分の宗教の象徴だけではなく、他宗教、隣人の宗教の象徴に対しても心の扉を開くこととなります。実際、文字主義的な信仰理解に固執する限り、真理はただ自分の宗教にしかありません。ここで、排他主義は当たり前のこととなります。文字をもって理解した宗教とは、教理と思想が互いに異なるものにならざるを得ないからです。すべての宗教が正しいものになるのは不可能です。しかし、一端、象徴を通して神に出会い、象徴から自由になってからは、今まで一つの宗教のみの象徴体系を通して霊的生活を営んできたことから自由になり、他宗教の象徴に接し、そこから学びながら霊的生活をすることが可能になります。こうして、開放的で豊かな多元的霊性の世界が開かれます。自分の宗教の言語と伝統を主に学びまた用いながらも、他宗教のことを自由に渉猟しながら霊的な栄養分を吸収する、宗教多元的霊性が開かれることとなります。

そして、ここからもさらに進んで、宗教的象徴から解放された人には、すべてのもの、すべての経験が宗教的経験になる、実に「超宗教的霊性」が開かれることもできます。宗教多元的霊性さえ乗り越え、宗教と非宗教、神と世界、世間と出世間の区別までも超越する霊的境地が開かれるのです。あえて宗教的象徴だけが超越への道を開くのではなく、世

俗的経験を通して悟りと知恵を得ることになり、神に出会うことになります。宗教と非宗教の境界が崩れ、何時、何処でも神に会い仏を見る境地が開かれます。存在するすべてのことが超越の象徴になり、世界の煩雑な言語や多様な経験のすべてが、超越への通路になります。神あるいは絶対的実在には、宗教と非宗教、聖と俗、真と俗の二元的区別が存在しないからです。神には宗教が要りません。神は、キリスト教信者でもなければ、仏教徒でもありません。

このようにして神に出会い、宗教的象徴から自由になりますと、宗教と非宗教、聖と俗、真と俗、世間と出世間、神と世界、自然と超自然の二元的対立そのものを超越する、文字通り超宗教的靈性が開かれます。宗教ではない宗教の世界が開かれ、神を越えた神に出会うことになります。というよりも、神からさえ離れる靈性の世界が開かれます。「私は、神から自由になるようにと、神に祈る」というマイスター・エックハルトの大胆な発言は、こうした境地についてのものであると思われる。また、エックハルトは言いました。「生に向かって『おまえは何故に生きるのか』と問い続けるとしても、『私は生きるが故に生きる』という以外の答は返ってこないであろう」(「何故なしに生きること」上田閑照訳『ド

イツ語説教集』創文社、2006年、所収)。禅仏教で言われる「平常心が道になる」という境地です。宗教的象徴だけが神に出会わせる象徴ではなく、万物が神に出会わせる象徴になり、神の光、仏の光明で輝く世界が開かれます。生まれることと死ぬこと、食べることと寝ること、存在することと愛する一つ一つの瞬間、そして真善美を追求しながら生きること自体が宗教的生き方になります。そうなりますと、宗教は要らなくなり、尋道学舎のような、特別な空間も要らなくなります。

こうした二つの意味の超宗教的靈性、すなわち、宗教と宗教の間の隔たりを自由に越える多宗教的靈性、そして、宗教と非宗教、聖と俗、真と俗が一つになる超宗教的靈性こそ、人間の精神が追求できる最高の靈的境地であると信じます。また、こうした超宗教的靈性こそ、脱宗教の時代を生きる現代人が追い求めるべき靈性であると思います。こうした靈性が、本日開院する尋道学舎が求める靈性になるようにと期待しております。本日、ここに集う皆様の参加を呼び求めながら、私の開院の講演を終らせていただきたいと思いません。

(金 承哲訳)

きる・ひ・そん  
尋道学舎開院